

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十二年十一月一日発行（毎月一回一日発行）
第十七卷第七号（通巻第一九九号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第199号

11. 2010

特牛句碑

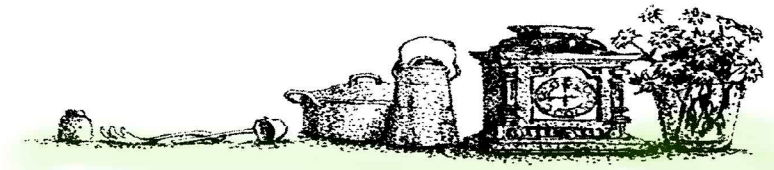
品川 鈴子

烏帽子にて判官きどり七五三

玉砂利を陣笠連の七五三

七五三坂東ぶりの陣羽織

丑うまれ特^{こっとい}牛句碑へ菊散華



特牛めく句碑赫らみて寒夕焼

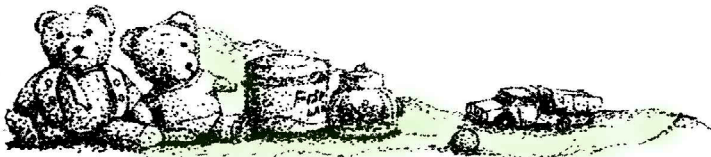
寒夕焼け挺子でも退かぬ特牛句碑

特牛句碑どつかり据わる月の寺

特牛碑しやがめば摩耶の霜柱

特牛碑むつくと起きる冬の虹

悴けずに天城太鼓の身は撓う



玉

鈴

吟

香川 島内 美佳

握り返す力の強しねむの花
研修医の孫が付き添ひ夏陽射す
片陰を選んで歩く退院日
半切を書き上げ汗の吹き出でぬ
白鵬の鋭い目付き玉の汗

大阪 島本 知子

夜店裏バケツ二杯の溶き卵
発電機ぶんぶん喰る夜店かな
串焼き売りの横で気楽なビール売り
金星も瞳凝らして花火待つ
一点も欠けずひらきし大花火

愛媛 鈴木てるみ

宿題は記事の切り抜き終戦日
向日葵に姫という種の戦後なり
鉄筋の家まるごとに打水す
泳ぎ浜水上バイクの激突す
長き夜に推敲をして句を損ね

大阪 鈴木 浩子

駅炎暑舟型屋根の尚も反る
午前五時棚経洩るる在所なり
見張りする蜻蛉漁港の船溜り
糶残る蝦蛄がむしやらに腕きをり
天牛が御用伺ふ中山道

岡山 瀬口ゆみ子

山鉾の軋みと共にどよめけり
揚花火天守炎上するごとし
雑踏を離る路地裏月涼し
切れかけの灯り明滅熱帯夜
しやがむ子の見入る仰向き油蟬

兵庫 高橋 大三

女の童浴衣で背伸び呼び鈴押す
花火開く赤青緑金銀に
海面に花火開きて孔雀なり
開くまで花火の音はしゆるしゆると
花火の粒音立て撒かるばらばらと

大阪 竹下 昭子

洗ひ髪九才にして女なり
緑陰にシーソーばったんばったんこ
かなかなや地熱はいまだ冷めやらす
盆の月悪声ながらと音頭取り
だみ声の師匠の音頭踊りの輪

大阪 武田ともこ

白あぢさみ峠の茶屋を埋めつくす
熊本ではこんな降り方あばれ梅雨
玄関の出入りにあわてるちび蜥蜴
並びぬて父はメールに子は氷菓
独り居に蠅の庭灯ともさず

愛媛 武智 恭子

皮脱ぎて節が増えゆく今年竹
室内で羽化油蟬動かざる
百日紅眩しく咲ける花万朶
農夫来て蝮捕獲の談話あり
香の匂ふ茅の輪くぐりて厄払ふ

大阪 谷 泰子

西の空バリリと割れて驟雨馳す
人の世に怒り顕なはたした神
まちがへて来し盆の夜の救急車
棕櫚の葉のそよりとせぬ油照り
ハンドボール選手全員汗飛ばす

大阪 恒成久美子

霊園のバス待合所葦簀立て
空蟬の葉裏にしがみつく力
葛ざくらシニアコーラス固絆
蟻蛸の子跳ねる原つば鬼ごっこ
七夕笹横文字多し首都ホテル

兵庫 角谷美恵子

足元に落蟬の鳴く夜の静寂
祖母となる自覚も湧きて涼新た
ジャンプするセーラー服に夏の雲
炎昼や吾が統治下に核家族
干瓢乾す忍び返しのある屋敷

愛媛 年森 恭子

溪流の茶室はこちら釣葱
空腹をラムネで充たす残業日
街中に帰省の色が溢れをり
歳月を孫に語らむ古梅酒
美しき誤解はとけず蛇苺

兵庫 内藤 三男

描き上げて遅き昼餉の胡瓜揉む
ノモンハン隣はレイテ墓洗ふ
眼底に音も収めし大花火
底紅の昨日の暑さたたみ落つ
秋耕や高々と盛る畝の土

薬草歳時記

(二九八) キササゲ(木豎豆)・ヒサギ(楸・久木)
市橋章子

ぬばたまの夜の更けゆけば久木(楸)生ふる
清き川原に千鳥しば鳴く

山部 赤人
『万葉集』卷六・雑

キササゲは和歌では、河原や山に生える大木として、千鳥・秋風・時雨・月・霜など、秋から冬の景物と取り合わされているが、俳諧では、秋季である。その果実にポイントを置いたからであろう。

ノウゼンカズラ科の落葉高木で、十メートルほどまで伸びる。中国中南部原産。日本各地で栽培され、山地や河岸などに野生化もしている。

別名を、雷の木ともいい、高木で水気を好むことから、雷除けになるといわれ、神社、寺院、城など大きな建物のわきに植えられている。家康公が殊に雷がお嫌いだったというわけでもあるまいが、上野の東照宮の境内にも立派なキササゲの木がある。

葉は対生し広卵形または円形で、桐の葉に似ている。六〽

七月、枝先に大きな総状花序を出し、白色または淡黄色の桐に似た花をつける。十月頃長さ三十センチほどの細長い蒴果を群がり下げる。これがササゲに似ており、キササゲの名の由来である。

秋に果実の莢が割れる前に採取し、日干しにしたものを(粹実・キササゲ[㊦])と呼び、薬用にします。

体内の過剰なナトリウム(塩分)の排出を増加させる作用のあるカタルポサイド、カリウム塩などを含み、利尿剤として、腎炎や浮腫に用いる。一日量10グラムを煎じ、三回に分けて服用する。

根皮や樹皮は中医方では、解熱、駆虫、黄疸などに用いられる。

「地方の古い町を歩くと、庭にこの木を植えている家がある。聞いてみると、昔は漢方医だったとか、漢方薬店だったという事が多い」と伊澤一男氏が『薬草カラー大事典』の中に書いておられる。

参考文献 『原色牧野和漢薬大図鑑』三橋博監修北隆館

『薬草カラー大事典』伊澤一男主婦の友社

『世界有用植物事典』編集委員代表堀田満平凡社

著者略歴神戸薬科大学卒

キササゲ [キササゲ属] (のうぜんかずら科)

Catalpa ovata G. Don
(楸、木豇豆)

花期： 6～7月
果実(粹実<キジツ>)
夏～秋に束になって
約30cm位の長さにな
り下がる。

樹高：3m～6m
落葉高木

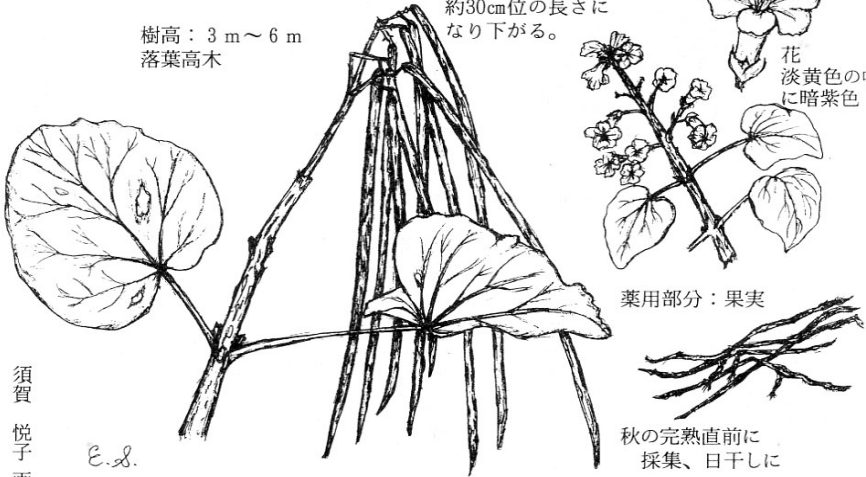
花
淡黄色の中に
暗紫色

薬用部分：果実

秋の完熟直前に
採集、日干しに

須賀
悦子
画

E.S.



枝おほふ楸や山をかくし題 井原 西鶴

村雨の夜まげになりて散る楸 谷川 護物

木豇豆の実は豇豆に似何かに似 高濱 虚子

きささげの千筋に垂るる秋暑かな 初山 梓月

団扇すてし女と見ばや門楸 松尾 竹後

きささげを雨霽する別れかな 富安 風生

木豇豆の古木上野の東照宮 * 片野 光子

木豇豆の実を吹き飛ばす風の如 * 金子 清孝

木豇豆や川で遊びし疎開時代 * 佐田 昭子

木豇の方へ石跳び川渡る * 塩出 眞一

(* ぐろっけ)

鈴の奏

品川鈴子選

浜育ち女飛び乗る祭舟 兵庫 大西 和子

朝どりのよき艶選び茄子の馬

蝉しぐれ蔵の扉に琴柱紋

館涼し目鼻素朴に縄文面

味と値に折り合ひつけて鰻の日 兵庫 平田恵美子

火傷跡性懲りもなく土用灸

濃紺の想定外になすび漬

手巻鮫母の話に逸れてゆき 大阪 吉田 和子

梅雨晴間メンバー足りぬ草野球

ひよつとこの口から色づく石榴の実

廃船の底突き抜けて花茨

太極殿まで日傘重たき遷都祭 兵庫 吉田 耕人

アカペラの軍歌十八番の生身魂

特攻の成れの果てらし生身魂

玉音を聴き灼け砂を駆けしこと

われは十才戦果てたる重い夏 兵庫 荒木 稔

盆の僧オランダ坂を下りて来し

兵庫 荒木 稔

天炎ゆる愛宕山は影をくづさざる

のきしのぶ人づてに聞く新仏

芋殻火やすこし猫背の母なりし

漁夫渡る真珠筏に卯波立つ 兵庫 鈴木 愛子

身を潔む五鈴の渚朝涼し

瀬戸内に大橋跨ぐ鱒雲

炎帝の怒りやかくも猛暑とは 兵庫 櫻木 道代

日盛りに松の影濃し船溜

流れ藻のうち重なれり秋暑し

星赫く名もなき硯洗ひをり

浜茶屋に氷旗ゆれにもつ番 兵庫 改正 節夫

ひたすらに塾への道を大西日

原爆の傘の如しや夏の雲

炎天に外出止められ八十翁

小波に時移ろひし夕涼み 兵庫 長瀬 節子

伸び過ぎて表札隠すかぼちゃ蔓

滝の上ゴンドラ行き交う手を振りて 兵庫 長瀬 節子

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 小阪 律子 〃

*選句は全て 品川鈴子

浜育ち女飛び乗る祭舟

大西 和子

浦祭なのか威勢の良い見物衆が岸や渚に溢れて船渡御などを囃し立てる。やがて御座船が沖の方へと動きだすと、祭好きの血が騒いで女だてらにじつとしておられない。浜辺育ちは小舟にも慣れたもの。少々離れた舷へも身軽に飛び乗って追っ駆け、祭りを満喫する。

手巻鯨母の話に逸れてゆき

平田恵美子

家の台所に主婦たちが寄って気がねなく簀子巻きの鯨をつくと、話はずみ、久々に割烹エプロンの甲斐々々しい母の姿も思い起こす。他家へとついで姉妹などがいると、懐かしい日日が話題となって、甘酸っぱい追憶に浸ることだろう。

ひよつとこの口から色づく石榴の実 吉田 和子

おどけた口を尖らしたり、わざと歪めたり。ひよつとこ

とは、火男（ヒヲトコ）の転じとか。火を熾す時の顔つき。石榴を覗いているとどこか似ていて、口元に火の色が映える様に、まず口から色づくのも楽しい発見。やがて石榴は全体に赤く覆われる。

玉音を聴き灼け砂を駆けしこと

吉田 耕人

六十五年前の夏、いつ命を落とすかも知れない危険と隣合わせの、不自由で息を詰めるような生活を強いられていた十才の少年の心にラジオから流れる天皇陛下のお言葉はどのように響いたのだろう。内容はよくわからずとも、周りの大人達の様子から大凡の察しは付く。呪縛から解き放たれ、思わず灼け砂の上を走り出した少年に力強さを感じる。

のきしのぶ人づてに聞く新仏

荒木 稔

故郷の旧盆に帰られたのだろうか。懐かしい人との久しぶりの再会。その会話の中に最近亡くなられた人の事が出てきて、あの人もついに鬼籍に入られたのか」と故人を偲

んでおられる作者の気持ちに季語の軒忍に込められている。

瀬戸内に大橋跨ぐ鯛雲

鈴木 愛子

昔は連絡船が唯一の交通機関だった瀬戸内海。今では土木工学の粋を集めて造られた巨大な橋が三本も架かり、ずい分と便利になった。その大橋の遙か上には小さな白い雲が斑紋をなして広がり、細波のようにも魚の鱗のようにも見え、空はいつしか秋の気配を漂わせている。人の手になる大橋とその上に広がる鯛雲。雄大な景が目には浮かぶ。

日盛りに松の影濃し船溜

櫻木 道代

陽射しが強く誰もが外出を避ける夏の午後。灼熱の太陽を遮るように、こんもりと茂った松が影を落している船溜へ涼を求めて立ち寄りたのだろう。そこにあるのは、風の中で進むヨット、オールで漕ぐボート、それとも遊覧船か釣り舟か？もしかしてその昔は名立たる水軍の舟隠しの場所だったのかも…と想像が広がる。

原爆の傘の如しや夏の雲

改正 節夫

昭和二十年八月十四日、日本はポツダム宣言を受諾して

翌十五日太平洋戦争は終結した。これがあと十日早かったら…と誰もが思った広島と長崎の惨事。原子爆弾が投下された直後、今まで目にしたこともない巨大な茸雲が出現した。それを原爆の傘と表現された作者。平和への思いを新たにされたことだろう。

伸び過ぎて表札隠すかばちや蔓

長瀬 節子

夏の暑さを少しでも和らげようと、窓辺に朝顔やゴーヤーなど蔓物を植えて緑のカーテンを作るのがエゴな生活だとか。作者は南瓜を植えられた。それが予想外に成長し、涼しい影を提供してくれたのはよいが、表札を隠されてしまったては…とちよつぷり困り顔。

向う岸姉やも知れぬ螢飛ぶ

松村 晋

対岸の闇に光る螢火を見て「あれは姉さんかも？」と思われた作者は最近姉君を亡くされたのだろうか。川を隔てて作者のいる方は此岸、向う岸は彼岸。そこに神秘的な光の明滅を見つけて、「姉やも知れぬ」と姉君を偲ばれる作者は、姉君の上に遠い昔の母上の悱を重ねておられたのは…と深読みしてしまうほど切ない。